

AFC Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

3

2016

特集 3・11大震災5年後。飛躍へ



特集

3・11大震災5年後。飛躍へ

3 地域の特性を制約条件に農業が新展開

伊藤 房雄

震災から5年経過した今、宮城県の津波被災地農業の復興状況を捉え、これからの東北農業の創造的発展に向けて解決すべき課題を探る

7 確かな検証から考える漁業復興の方策

廣吉 勝治

沿岸部において最も甚大な被害に見舞われた漁業・水産業の実態と施策の課題を、被害と復興に関する研究から問題提起をしよう

11 現地ルポ 原発被害を乗り越える農業立県

村田 泰夫

原発事故や風評被害を乗り越えて奮闘する農業経営者の現地ルポを交えながら、福島農業の今に迫る

特別座談会

15 座談会 特集インサイドストーリー 3.11。茫然自失の瞬間から 復興再生の来る日見つめて

情報戦略レポート

23 経営再開や復旧・復興が本格化 震災からの復興を今後も全力で支援

経営紹介

経営紹介

25 株式会社大分サンヨーフーズ／大分県 東照寺 忍

農業に参入し、耕作放棄地をユズ園に再生した食品企業は、地域の農業復興に役立つためにも作業効率を重視し、累積赤字の解消を目指す

変革は人にあり

27 NPO法人えがおつなげて／山梨県 曾根原 久司

地域資源を活用し、都市と農村が共生できる地域社会のネットワーク構築に取り組んで15年。今、農村に必要とされる「農村起業家」の育成にも尽力する



撮影：北條 純之

長野県松本市
2008年早春撮影

冬を越すキャベツ

■ 厳しい冬の寒さに耐え、春の訪れと共に雪の中から顔をのぞかせた。それは、まばゆいほどの光に包まれた生命である ■

シリーズ・その他

観天望気

真の「地方創生」に求められること

片山 善博 2

農と食の邂逅

株式会社やさいの樹／静岡県

塚本 佳子

秋岡 榮子(文) 河野 千年(撮影) 19

耳よりな話 168

酪農関連の碑めぐり(その11) 加茂 幹男 22

書評

窪田 新之助 著

『GDP4%の日本農業は自動車産業を超える』

村田 泰夫 30

まちづくりむらづくり

「むら」と「まち」をつなげて

子ども心を耕す「楽校」での体験

NPO法人やまぐち里山環境プロジェクト／山口県

嘉村 則男 31

インフォメーション

「農業経営支援セミナー in 新潟」を開催

新潟支店 34

農産物販売戦略を学ぶ交流会を開催 帯広支店 34

マッチングも実現した交流会を開催 宇都宮支店 34

宮城県内の稲作農家を対象とした勉強会を開催

仙台支店 34

交叉点 特別レポート 米国養豚業の競争力を探る

～アイオワ州訪問記～ 千葉支店 35

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第11回アグリフードEXPO東京2016 38

望天 観気

真の「地方創生」に求められること

今、全国の自治体が地方創生に取り組んでいる。地方の人口減少に歯止めをかけた。地方の人口が減る原因の一つは、若い人たちが大都市に流出するからだ。流出を防ぐには、魅力ある雇用を確保しなければならず、それには地域経済を活性化しなければならない。自治体はそのための総合戦略を策定し、それをもとに国が財政支援をする。

さて、これで地方創生が実現するかどうか。うまくいくに越したことはないが、必ずしもそうならないのではないかとというのが、現時点での筆者の見立てである。

気になっていることのひとつが、相変わらず国の側の視点と地方が抱えている課題との間に大きなズレがあつて、それが正されなのまま、もっぱら国の側の視点に基づいて事態が進行していると思われる点である。例えば、プレミアム付き商品券である。

地方創生の目玉として国が自治体に^{奨励し}、ほとんどの自治体がそれに応じて実施したこの政策にはどんな意味があつたか。一万円で一萬二〇〇〇円の購買力が得られるのだから、それが地域内でしか通用しないという条件があるにしても、わが国全体で見れば確実に消費を増やす効果はある。GDPのことに気を揉む国の側からすると、それなりに効果的な施策ではあつたはずだ。

では、これが地方の課題を解決することに寄与したかと言えば、そんな話は聞いたことがない。域内の商店街や量販店の売り上げが一時わずかに増えたからと言って、地域経済の今後に展望が開けるわけではないし、地域の雇用が増えることも期待できない。地方創生でまとまった金を使えるのなら、別の分野で地域に有効なことがあつたはずだし、プレミアム付き商品券を発行するにしても、もつと知恵と工夫があつていい。

例えば、地域の産品の購入にしか使えないということにしたなら、地域の食品加工業などの後押しになり、身近なところで農業の六次産業化のきっかけになつただろう。地方創生では、地域は自らの課題にもっと主体的に取り組まなければならないし、国にはそれをじっくり待つだけの余裕と度量がほしいとつくづく思う。

慶應義塾大学法学部 教授

片山 善博

かたやま よしひろ

1951年岡山県生まれ。東京大学法学部卒業。自治大臣秘書官、鳥取県総務部長、自治省固定資産税課長などを経て、99年鳥取県知事(2期)。2007年4月慶應義塾大学教授。10年9月から11年9月まで総務大臣。同月慶應義塾大学に復職し、現在に至る。著書に「民主主義を立て直す日本を診る2」「片山善博の自治体自立塾」など。



農業を語るとき
いつもエチオピアの
大飢饉を話し始める
私の出発点なんです
新規就農の原点だから

農と食
の邂逅

塚本 佳子 さん

静岡県菊川市
株式会社やさいの樹 代表取締役

大学卒業後、選んだ道が青年海外協力隊の仕事。赴任地の南米、アフリカの地では、現地中学校で生物を教え、野菜栽培の指導も経験。アフリカ大陸ザンビアで平均寿命三二歳の現実を見て、帰国して迷わず新規就農を選択した。





「姿が見えないときは畑を捜せばよい」と言われるほど農作業に情熱を注ぐ塚本さん (P19・P20右上) 出荷前にキャベツの状態をチェックし、次の栽培の参考にするのも大事な仕事のひとつ (右下右) スタッフは社員3人、それに6人のタイ人の研修生が加わり、にぎやかだ (右下左) 最近では「女性経営者として」というタイトルで講演を頼まれることも増えてきた。オフにはミュージカル鑑賞に出掛ける (左)

夢は途上国での農業貢献

かつてアフリカでの国際協力を志した女子中学生が新規就農し、今、静岡県で農業を営んでいる。

静岡県菊川市。二六畝の農地で、レタス、キャベツ、オクラなどを生産する農業生産法人「株式会社やさいの樹」は、年間売り上げ一億三〇〇〇万円の黒字経営である。経営者の塚本佳子さんは一九七〇年生まれ。

「姿が見えないときは畑を捜せばよい」と言われるほど、日々、野菜作りに情熱を傾けている。公務員の家庭に生まれ、神奈川県湘南で育った。農業生産者の減少が問題視されながらも、農家出身でない人が新規就農する道は険しい。特に女性の場合、多くは農家出身か、農家に嫁いだ女性たちだ。佳子さんは「苦勞を知っている農家出身だったら、農業に挑戦しなかったかもしれない」と明るく笑い飛ばす。

中学生の時にエチオピアの大飢饉を伝える新聞やテレビ報道に驚愕した。当時大きなニュースとなっていたが、勉強も、遊びも、部活も忙しい中学生は、その悲惨さに心を痛めながらも、いつのまにかそうした想いが記憶の片隅に追いやられていくのが普通である。

しかし、佳子さんは農業を語るとき、このエチオピアの大飢饉の話からいつも始める。それが今日の彼女の出发点だからだ。

当時の部活の顧問の先生が駅前での募金

活動や支援物資を送る活動をしていると知った佳子さんは、その影響を受け、「いつか私もアフリカで国際協力の仕事をしたい」と決意した。

大学は日本大学の農学部拓植学科(現生物資源科学部国際地域開発学科)に進学した。同期生一八〇人のうち女性は一割。入学当初、国際協力を熱く語っていた同期生たちの多くは、一般企業への就職の道を選んだ。

一方、卒業後の進路として彼女が選んだのは青年海外協力隊への参加である。任地は南米のエクアドルで、佳子さんに与えられた任務は、カラサコンという村の農業専門学校で農業経営を教えることであった。トマトやパイナップルを作って、トラックに積み込んで売りに行き、その売り上げで次の種を買うという実習である。研修でスペイン語を習ったとはいえ、まさしく孤軍奮闘の連続だった。村は豊かではなかったが、温かく迎えられ、友達もできた。

やがてカラサコン村を去る時が来たが、その時の佳子さんの気持ちは複雑だった。「村の生活は厳しかったけれど楽しかった。でも、私は本当に役に立てたのだろうか。このままでは、どんどんアフリカから遠のくばかり」

念願のアフリカで挫折

満たされない想いを抱いた佳子さんは、再び学ぶことを決意し、鳥取大学乾燥地研



まだまだやりたいことがある。ハウス園芸や栽培品目の拡大、タイ人研修生たちの郷里を訪ねる旅。アフリカにもまた出掛けたいと語る

究センター修士課程へ進学した。アフリカ行きへの想いを込めた次のステップの選択だった。

二年間で修士課程を修了し、次は農業の実技を身に付けるために宮古島の農業生産法人で、ピーマン、ゴーヤ、ナス、ネギ、カボチャ作りに励んだ。野菜の栽培技術にも自

信が付き、「今こそ動かなければ」という気持ちに突き動かされ、再び青年海外協力隊の活動に身を投じる。

今度の任地は念願かなってアフリカのザンビア。佳子さんは三二歳になっていた。ザンビアでは中学と高校が一体となった学校で生物を教えた。農業実習ではハクサイな

どの葉物野菜や、痩せた土地でもよく生育するキャッサバ芋などを栽培し、市場に売りに出掛けた。水道も電気もない生活だったが、日本できちんと勉強してきたという自負もあった。

しかし、思わぬことで気持ちが折れた。それは治安の悪化である。窃盗団が村を襲い、人々を射殺するような事件も起こった。一八時以降は外出禁止になり、逃げようにもバスは来ない。明かりを消して真っ暗な中、夜な夜な一人で過ごすのは正直怖かった。

また当時、平均寿命が三一歳という現地での生活は、幼くして死んでいく子どもたちを目の当たりにすることもあった。それを日常として受け入れながら生きていくことに強いショックも受けていた。現実の国際協力は美談ではないことを悟った。

アフリカでの任期を全うして日本に戻った佳子さんは、日本で農業をやりたいと考えるようになった。

日本で野菜作りに没頭

二〇〇五年、佳子さんは東京のファーマーズフェアに参加し、そこで群馬県の株式会社野菜くらぶの澤浦彰治社長と出会う。「女では農業はできないのですか？」と、いきなり澤浦さんに問い掛けた。その頃の佳子さんは、どこに行っても「女には農業は無理だ」「それなら農家の嫁になれ」と言われ、壁にぶち当たっていた。

澤浦さんの知人で女性でも立派に農業経

営を切り盛りした人がいることや、野菜くらぶの先輩で実際に独立して農業者になっている人がいるという話に背中を押される形で、野菜くらぶの独立支援プログラムに参加した。二年間の研修を積み、農地の用意があった静岡県菊川市に移り住んだ。レタス栽培の手法を地元の農家の人たちから学び、〇八年、三八歳で農業生産法人「株式会社やさいの樹」を設立した。

農業法人の経営者として素晴らしい業績を誇る佳子さんだが、自身は得意な野菜作りに没頭している。営業や販売は野菜くらぶに、経理は税理士さんをお願いしている。「自分で全部やるうとは思わない。私は得意なことをやる。それが私の持ち場だからです」と誇らしげだ。農業という大事な産業を担っているという責任感と誇りは誰にも負けない。そして、国際協力の想いは今も消えてはいない。タイ人の研修生を受け入れ、野菜作りを丁寧に教えている。その人たちが母国に帰って農業者として成功してくれることが佳子さんの何よりの願いである。

そこに農業があっても、人々に食べ物が行き渡るとは限らないのが世界の現実だ。佳子さんの「農業」と「食」は「途上国から飢餓をなくしたい」という想いのもとで邂逅し、新規就農を果たして農業者として独立したことが、国際協力のプラットフォームになった。研修生たちが彼女から学ぶものは農業だけではない。

(秋岡榮子／文 河野千年／撮影)



酪農関連の碑めぐり(その11)

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

加茂 幹男

京 成電鉄・千葉寺駅の北東一キロメートルのところに「青葉の森公園」があり、公園北口駐車場そばの周回道路脇近くに「畜産技術研究発祥之地」の碑が建てられています。

副碑には「大正五年四月六日農商務省畜産試験場が本省に創設され翌年六月一日この地千葉県千葉郡都村に於て我が国の畜産技術研究は発祥した爾来七十年『千葉』は我が国の畜産試験研究機関の中心として常に畜産研究を先導し多くの輝かしい業績により畜産の発展に寄与してきた昭和五十五年

一月一日国立試験研究機関の筑波研究学園都市への移転に伴いこの地での研究を終えた『千葉』の畜産研究の栄光の不滅を念じ有志相集いここに記念の碑を刻む」と記載されています。

日本での畜産に係る試験は、一八八六年、国の農事試験場の前身である重要穀菜試

作地における飼馬用牧草の試作に始まり、九三年、本場を東京・西ヶ原とし、六カ所の支場を有する農事試験場が設置されて、牧草種類の選択と栽培、家畜・家禽の飼育と肥育、種苗の配布、飼料の分析鑑定などの畜産研究が芽生えました。

明 治の末頃の日本の畜産業は、まだ胎動期でした。近代国家を目指す政府は、畜産業を定着させるために、畜牛改良の基本方針を策定し、一九〇〇年に畜産振興の基地として、日本で最初の国立牧場、七塚原種牛牧場(現在

は広島県立総合技術研究所畜産技術センター)を広島に開設して、先進国からの優良家畜の導入、増殖・配布、畜産技術の普及などの業務を開始しました。

文明開化と共に導入された外来畜産は着実に根を下ろし、それを背景として、一六年に農商務省内へ畜産試験場が設置され、翌年には千葉県千葉郡都村に移設し、わが国での畜産技術研究が開始されたのです。



「畜産技術研究発祥之地」碑

畜産試験場は、社会情勢の変化を受け、折々に組織改編が行われました。

五〇年の試験研究機関の整備統合によって、畜産試験場は、農業技術研究所家畜部、同畜産化学部ならびに関東東山農業試験場畜産部に分割されましたが、六一年に再び、統合編成されました。七〇年には草地試験場が独立しましたが、畜産試験場が筑波研究学園都市に移転した後、国立研究機

関の独立行政法人化に伴い、二〇〇一年に統合し、独立行政法人農業技術研究機構(現在は国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構)畜産草地研究所が発足しました。

畜産技術研究は、組織の名称を変えながらも着実に実践され、家畜の改良、初生雛の雌雄鑑別法、日本飼養標準、人工授精技術、受精卵移植技術、通年サイレージ技術などの成果を創り、日本畜産の発展と日本国民の豊かな生活の実現に貢献しています。

F



Profile

かも みきお
1950年北海道生まれ。岩手大学農業機械学科卒業後、農林省東北農業試験場入省。農林水産技術会議事務局、(独)農研機構近畿中国四国農業研究センター四国農業研究監、(独)農研機構畜産草地研究所草地研究監などを経て、2010年から日本政策金融公庫に勤務。専門は畜産草地で、主な研究対象は飼料の収穫・調製・給与など。

『GDP4%の日本農業は自動車産業を超える』

窪田新之助著



(講談社・890円 税抜)

これから面白くなる日本農業

村田泰夫

(ジャーナリスト)

大量の離農者が出る今後、経営の大規模化が進み、これからの日本農業は一層面白くなる。日本農業の将来は明るいと、筆者の窪田氏は強調する。「農業は衰退産業である」という悲観論が大勢を占める農業界に一撃を与える内容だ。

本の表題の「GDP4%」は、みずほ銀行産業調査部の試算に基づいている。農業の生産性を50%上げるなどすれば、日本農業の総生産は四兆円余り増やせる。さらに農業の六次産業化で一〇兆円まで増やせる。すると、現在五兆円余りの農業分野のGDPは二〇兆円に増え、日本経済全体のGDP五〇〇兆円に占める割合は四%になるといふ。

農業の六次産業化の市場規模を二〇二〇年までに一〇兆円に増やしたいとする構想は、政府や自民党の「農業・農村所得倍増」計画にもある

が、実現性に疑問符が付く。二〇年の日本経済のGDPは五〇〇兆円より増えているだろうから、今は経済全体の1%しかない農業のGDPを4%に引き上げるのは、並大抵の努力では難しい。

読者に「エッ」と意外感を持たせるための表題なのだろうから、表題には目をつぶることにする。本文には、日本農業は衰退産業どころか成長産業化していることを示す「エッ」と思わせるデータが盛り込まれている。

わが国には一四〇万戸の販売農家がいるが、年間売上高が一〇〇〇万円以上あるのは、全体の七%の約一〇万戸しかない。この七%の農家が農産物販売金額全体の六〇%を占める。一方、売上高が一〇〇万円未満の農家は五八%もいるのに、全販売金額に占める割合はわずか六%。だから、「日本の食と農は、零細な農家が離農したところで揺るがない」と窪田氏はいふ。

実際のところ、農家の離農に拍車がかかっている。一五年の農業就業人口は二〇九万人と五年前より二〇%も減った。特に七〇歳以上の高齢者の離農が進んでいる。これをチャンスだと窪田氏は捉える。離農者の農地がやる気のある農家に集まり、規模拡大が急速に進むと期待できるからである。

フリーの農業ジャーナリストである窪田氏は、日本農業新聞の記者をしていた。その経験を活かして書かれた、この本には意欲的な農業経営者の声がたくさん紹介されていて参考になる。



読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2016年1月1日~1月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 農業と経済 2015年12月 臨時増刊号 世界をゆるがす中国農業		昭和堂	1,700円
2 減反廃止 農政大転換の誤解と真実	荒幡 克己/著	日本経済新聞出版社	2,600円
3 週刊東洋経済 2015年12月12日号 TPPで激変する日本の食		東洋経済新報社	638円
4 シカ問題を考える バランスを崩した自然の行方	高槻 成紀/著	山と溪谷社	800円
5 GDP4%の日本農業は自動車産業を超える	窪田 新之助/著	講談社	890円
6 JAが変われば日本の農業は強くなる	杉浦 宣彦/著	ディスカヴァー・トゥエンティワン	1,000円
7 海洋大異変 日本の魚食文化に迫る危機	山本 智之/著	朝日新聞出版	1,600円
8 農家と農業 お米と野菜の秘密	板垣 啓四郎/監修	実業之日本社	800円
9 漁師と水産業 漁業・養殖・流通の秘密	小松 正之/監修	実業之日本社	800円
10 農業への企業参入 新たな挑戦 農業ビジネスの先進事例と技術革新	石田 一喜、吉田 誠、松尾 雅彦、吉原 佐也香、高辻 正基、中村 謙治、辻 昭久/著	ミネルヴァ書房	3,200円



「むら」と「まち」をつなげて 子ども心を耕す「楽校」での体験

山口県山口市

NPO法人やまぐち里山環境プロジェクト代表

嘉村 則男



山村の郷山が活動舞台

山口市仁保大富地区は、中国山地の懐にあって仁保川という川の最上流部に位置し、豊かな自然環境に恵まれた静かな山郷です。かつては、農林業を中心に栄えていましたが、時代の流れと共に過疎、高齢化が進み、今では一八〇人ほどが住む小さな集落です。

しかし交通の便は比較的恵まれており、車で宇部空港まで約一時間、山陽新幹線が発着する新山口駅や中国自動車道や山陽自動車道のインターチェンジへも三〇分圏内です。

このような場所で、私たちNPO法人やまぐち里山環境プロジェクトは、「子ども心を耕す体験、大人の食の主体を取り戻す体験」をテーマに、里山環境を活かした都市と農村の交流活動、食農環境学習体験に取り組んでいます。体験型農業フィールドの「クラインガルテン大富」には交流施設の「農家楽」があります。「農家楽」は、田舎暮ら

し体験や農業体験の活動拠点となっています。都市と農村の交流活動はいろいろと取り組んでいますが、その中から「郷山野菜の楽校」をご紹介します。この「楽校」は、年間を通じ地域色があるコースで構成されています。

一つ目のコース「野菜倶楽部」では、ジャガイモなど数種類の野菜の栽培体験と季節によりダッチオーブンクッキングやソーメン流し大会、しめ縄作りなどを行っています。食べ物の生産現場を知ってもらうこと、農業や農村が持つ多面的機能や魅力を感じてもらうことが目的です。「漬物倶楽部」コースは地域のブランド農産物である仁保ラッキョウや、廃れゆく伝統野菜の仁保キュウリの良さを広めるために始めたもので、栽培から加工までを体験してもらいます。種の保存や伝統野菜を守る必要性を知ってもらうことで、消費者の購買意欲と生産者の生産意欲を合わせて向上させる効果があると考えています。「ジャム倶楽部」は出荷できない規格外の果実や野菜をジャムに

加工するもの。この倶楽部で作るジャムは来訪者にとっても人気で、本格的に売り出そうかと思案中です。その他、山菜やイノシシ肉など郷山の恵みを楽しむ「郷山キッチン倶楽部」もあります。

倶楽部によって異なりますが、活動は年七回程度、年会費は八〇〇〇～一万五〇〇〇円です。活動当日の昼食またはおやつ時には、倶楽部で作った漬物やジャムをはじめ、地元で採れた野菜や果実を使った、素朴ですが普段ではあまり食べない料理（例えば、ダッチオーブンで丸焼きにしたジャガイモなど）やお菓子を提供します。食事代が一〇〇〇円、おやつ代は五〇〇円です。参加できないときもあることを考え、年会費と食事代を別にし、そういう場合には、例えばジャム倶楽部であれば出来あがったジャムを郵送するなどしています。

これら「郷山野菜の楽校」の講師は、主に地域のお年寄りです。自身の生きがいづくりや、技術や知恵が地域の財産として守られ、いつまでも継承

profile

嘉村 則男 かむらのりお

山口県山口市仁保大富生まれ。約16年間、北海道で畜産技術者として従事後、1993年、山口県の生家にUターン。サラリーマンとして働く傍ら農業に従事。現在、水稲5ヘクタールと10頭の肉用牛繁殖の経営を営んでいます。NPO法人やまぐち里山環境プロジェクトを立ち上げ、さまざまな体験プログラムの提供を行っています。

NPO法人やまぐち里山環境プロジェクト

農業や農村が持つ多面的な機能を活用した子育てプログラム「郷山子ども倶楽部」や、食・農・環境をテーマにした、「郷山野菜の楽校」を展開しています。地域の住民はもとより、市内の子育て施設などとも連携して、子どもたちの創造性を高め、人間力を育めるようなプログラム作りを、また、食の原点を気付けるような体験プログラムを提供しています。

URL: <http://www.o-tomi.com>

子どもに原体験を

されることが大切だと考えています。現在講師は一〇人で、事前準備は私たちスタッフが先行い、技術など教えることに専念できるように配慮しています。

講師への報酬ですが、例えば、畑仕事であれば半日五〇〇〇円、しめ縄作りであれば二時間で三〇〇〇円です。時給換算でおよそ一五〇〇円を考えています。

市内の子育て支援施設や幼稚園、子ども会など非農村地帯の子どもたちを対象とした「子ども体験倶楽部」は、郷山の体験活動を通して食と農を学んでもらう取り組みです。

毎年二月の雪が残るまだ肌寒い頃に行つてい



上:「野菜倶楽部」でお年寄りから、しめ縄の作り方を学ぶ
下:炭窯に入るのは「ちょっとドキドキ、でも、とってもワクワク！」な体験

る幼稚園年長組の子どもたちとその保護者、先生が参加する「大富郷山探検プログラム」は、農家菜を出発して当地の景勝地である犬鳴公園の林道を通り、約一キロメートル程の山腹にある犬鳴の滝を見学、農家菜に戻つてくるといふものです。保護者は、農家菜で昼食の準備をし、探検には約四〇人の子ども、先生、私たちスタッフで行きます。

元氣いっぱいの子どもたちと林道を進むと、雪の重さで老木や竹が倒伏し、行く手を遮っています。(もちろん私たちは安全には十分配慮して事前準備を行っています。)倒木に直面した子どもたちは「ワー、道がないぞー!」「どうしようー!」などと大はしゃぎです。私たちは、なぜ、木が倒れているのかを説明しながら、「進むためにはどうしたらいいか」を子どもたちに聞きます。「倒れている

木の上を登る」などと子どもらしい回答もありつつも「木をどかして道を作りたい」と気が付きます。そこで私たちは持参した鋸やチェーンソーを使って、倒木を切ります。さらに先に進むと、切り立った断崖と犬鳴の滝が姿を現します。景色を見たり、冷たい渓谷の流れに手を入れて、季節外れの水遊びを楽しんだ後、子どもたちは大人でも躊躇するような岩肌の登山道を滝の落ち口を目指して、必死に進みます。巨岩に登った子どもたちは遠くの山並みに「ヤッター」とか「ヤッホー」と叫んだり。達成感からか、とても大きな声が出ているようです。

帰路には、行きに切り倒した倒木を持ち帰るミッションがあります。倒木にロープをつなぎ、ワイワイガヤガヤ引つ張りながら進みます。すると

炭焼き小屋があり、炭窯から木炭を「郷山野菜の楽校」の講師のおじいちゃん先生たちが取り出しています。興味津々の子どもたちは炭窯の中に入れてもらえないことに。初めて入る真つ暗な炭窯の中、木炭を運び出して手や顔が黒くなったり、墨を塗りあって大笑いする子どももいます。しばらく炭焼き小屋で過ごした後、農家菜に帰ります。そこではお母さんたちが温かい豚汁やお弁当を準備して待っていてくれます。さらに、炭焼き小屋でもらった木炭を七輪に入れ、各グループで火おこし合戦が始まります。程よく木炭に火が付くと、圍庭で育てたペットボトル稲で作ったかき餅が登場します。七輪で焼きますが、真つ黒に焦がしたり焼きの足りないことも。しかし、誰一人としてそのかき餅を捨てる子どもはいません。

荒れた山道を歩くことで自然環境の厳しさを知り、炭窯で木炭を触ることでエネルギーの源を知る。さらに、木炭で自分たちが育てた米で作られたかき餅を食べることは大げさに聞こえるかもしれませんが、まさに現代社会が抱える、食糧問題や環境問題の解決プログラムと言っても過言ではないと考えています。幼い子どもには理解できないのでは、と言われる方もいますが、これこそ子どもたちにとって原体験であり、ほんの少しでも体に残る記憶があればそれでよいと思うのです。

また、子どもたちにとって、地域の住民との交流は、子どもたちのコミュニケーション能力の発達や、人間力の形成といった、イメージジャンクが発達に大きな役割を果たします。子育てに悩む保護者の集う場としても成果があり、まさに農業・農

村の多面的機能の活用だと考えています。

全てはここから始まった

私は、一九九三年にふるさとの大富集落にUターンし五〇坪の田んぼで稲作を始めました。その年は記録的な冷夏による不作があった年で、天災に対応できる強い農業としてさまざまな情報がメディアで紹介されました。その中、合鴨農法にふと目がとまりました。有機農法で米が作られることや、もともと動物好きだったこともあり、九四年から合鴨農法に取り組みました。合鴨農法を実施するには、放し飼いの水田をネットや電気柵で囲い、合鴨の逃亡や外敵の侵入を防ぐ必要があります。その作業を、知人や友人が手伝いに訪れてくれるようになりました。またその後、交流を続けるようになる先生と小学生がほ場に訪れたことから、徐々に地域の人たちに知られるようになりまし。このような中、自然発生的に集まった仲間と私は、限界集落と揶揄される故郷を元気にするために、都市と農村の交流活動をしたいと話し合いました。集落の活性化には、町の人々が定期的に訪れてくれることで「まち」と「むら」がつながることが大切です。また、せっかくの来訪が単なる農業体験に終わるのではなく、農村地域の多様性や、「食」と「農」の重要性について理解してくれるようにすることが、地域の活性化の礎になると考えたのです。

その秋には「合鴨祭り」としてカモ汁と、かまどで炊き上げた合鴨米を前述の小学校の児童らに食べてもらいました。子どもたちは当初、目の前を泳ぎ回るアイガモの命を奪い食えることなど

想像もできなかったことでしよう。しかし、何度も話し合いをするうちに生き物への感謝の気持ちや食の大切さを学び、みんな笑顔で喜んで食べてくれました。これらの体験が現在の取り組みのもととなり九四年大富地区の里山風景と仲間の思いを大切にするシンボルとして「里山」を冠にしていた、任意団体「里山環境プロジェクト」を発足させたのです。私は、各種の勉強会や講習会でグリーン・ツーリズムについて勉強しました。そして、二〇一二年、団体をやまぐち里山環境プロジェクトに改組しNPO法人となりました。

二〇一四年には年間約一三〇〇人の方が来訪してくださいました。ホームページを見て興味をもってくれる方もいます。しかし、多くはリピーターや、口コミによって増えています。前述の通り交通の便がよいこともあり、県外はもとより、首都圏からも来てくださる方もいます。一方で、宿泊施設などを充実し、もつと長く滞在して交流を深める時間を作れば私たちの集落の良さを知ってもらえるのではないかと考えています。また活動を維持するためには、目的や理念を理解して活動できるスタッフを育てる必要があると考えます。

最後に、地域の朗報を記載いたしました。私たちの活動に参加した若者が二つの家庭をつくり、それぞれが五人の家族と共に移住し定住してくれました。一時は「むらおさめ」を覚悟した私たちだけに、子どもたちが元気に走り回る姿を見るのは大きな喜びです。そんな子どもたちを見るにつけ、大富のかけがえのない風景や暮らしを守っていくことこそ、私たちの与えられた役割だと強く感じています。

「農業経営支援セミナー
in新潟」を開催

昨年二月二十六日、新潟市内で新潟県農業法人協会との共催によるセミナーを開催し、公庫のお客さまや関係機関の方々七八人にご参加いただきました。

北海道大学大学院の柳村俊介教授には「家族大規模農業経営の継承問題」をテーマに、また新潟県弁護士会の小林斉史弁護士には「農業における事業承継をめぐる法務」についてご講演いただきました。参加者からは「今後の経営方針を検討する際の参考になります」「農業者からの経営相談に役立つテーマで有意義でした」などの感想が寄せられました。(新潟支店)



早期の経営継承が重要と語る柳村教授

農産物販売戦略を学ぶ
交流会を開催

昨年二月一日、交流会「アグリフードネットワークin帯広」を開催し、お客さまや関係機関の方々総勢二二〇人にご参加いただきました。

都内のスーパー約五二〇店に「都会の直売所」を展開する株式会社農産物総合研究所の及川智正社長より、農協や市場を通さない新しい形の農産物流通についてご講演いただきました。また、農業経営者六人に今年度の加工販売戦略活動について体験報告をしていただきました。参加者からは「農業の魅力を実感しました」などの感想が寄せられました。(帯広支店)



農産物の加工販売戦略について語る農業者たち

マッチングも実現した
交流会を開催

昨年二月二日、宇都宮市内にて「農と食の交流会」を開催し、農業者や食品製造・流通業者など二〇〇人にご参加いただきました。

講演会では「消費者が求める農産物及び加工品を考える」と題し、四〇年間黒字経営を続けているスーパ、株式会社福島屋会長の福島徹氏にご講演いただきました。懇親会では活発な意見交流が行われ、福島屋との商談にも結び付いた方もいらっしゃいました。参加者からは「農産物の販売方法について深く考えるきっかけになりました」などの感想が寄せられました。(宇都宮支店)



参加者は講演に熱心に耳を傾けていました

宮城県内の稲作農家を
対象とした勉強会を開催

一月十九日、稲作経営ネットワーク勉強会を開催し、米生産者など八人にご参加いただきました。

鳥取県の有限会社田中農場の田中正保社長から大規模稲作経営の取り組みについてご講演いただき、次いでセンコン物流株式会社のシドレンコ・エレナ課長からロシア向け米輸出の現状について、最後に東北農政局からT P P 関連対策の概要について情報提供をいただきました。

講演後、参加者から田中社長へ生産技術などの質問が相次ぎ、水稲乾田直播の方法などについて丁寧にご説明いただきました。(仙台支店)



知人を紹介、販路を拡大した田中社長の講演

特別レポート

● 交叉点 ●

米国養豚業の競争力を探る

アイオワ州訪問記

千葉支店 伊藤 巨

世界第二位の豚肉生産国であり、日本の豚肉輸入先最大シェアを誇る米国。TPPにより豚肉関税引き下げが合意され、米国養豚界の動静が気になるところだ。競争力の源泉がどこにあるのか、現地訪問の結果をレポートしたい(昨年一〇月から一月にかけて、J A 東日本くみあい飼料株式会社主催の米国養豚業視察研修に参加)。

*

今回訪問したアイオワ州は、米国の中西部、コーンベルトに位置し、豚肉の生産額は全米一位である。コーンベルトから得られる豊富な飼料をもとに採卵鶏や酪農も上位に位置し、農業総産出額はカリフォルニア州に次ぎ全米二位と、まさに大農業州と言える(順位は米国農務省統計・二〇一四年時点)。

体育館のような肥育豚舎

設備の低コストを痛感したのは、主に養豚業を対象にした農業資材の販売・メンテナンスを行う資材店

の展示である。日本では繁殖から肥育までの一貫経営が多いが、米国では繁殖部門は大資本のインテグレーター、離乳期以降の肥育部門は一般的な農業者層が担う分業体制が多いという。

この資材店では、農業者が標準的に使用するウィーン・トゥ・フィニッシュ(離乳から出荷までの意)の豚舎約一六〇〇平方メートル、土地付きで七〇万USD(約八二六〇万円)で販売しているとのこと。この豚舎は、離乳期以降の豚約二四〇〇頭の収容が可能で、かつ土地付きであり、日本に比べ割安と言えるだろう。

なお、ふん尿処理施設は別途必要だが、同州においては蒸散池(ラグーン)を設置すれば済むケースもあるというから、日本に比べて設備投資の負担は少ない。

豚舎の図面や、映像で豚舎が出来る上がる様子を見たが、内部はさながら体育館のような広さで、それに取り付ける給餌機や給水機も大きく、換気扇に至っては人の身長ほ



Data

米国アイオワ州 (英: State of Iowa)

- 州都: デモイン
- 面積: 145,743km² (全米第26位)
- 人口 (2010年): 3,046,355人 (全米第30位)
- アメリカ合衆国中西部に位置し、「アメリカのハートランド (中心地)」と呼ばれる州である。
- 農業は州経済の主要分野であるが、農産物の生産と販売は州総生産高の約3.5%にすぎない。
- 主要な農産物は豚、トウモロコシ、大豆、エンバク、牛、卵および酪農製品で、エタノールとトウモロコシの生産は国内最大の州である。

どの大きさである。大規模で労働力をかけずに作業ができる、合理的な米国の設備動向は注目だ。

合理的な養豚経営

現場での経営の仕組みはどのようなものか。養豚農業者を訪問し、話を聞いた。訪問先は母豚二四〇頭、米国では少ないタイプの一貫経営である。養豚の他にも飼料作物を大規模に作付けしている。驚いたのは、この規模で労働力は本人のみ、夏休み期間だけ中学生の子どもが手伝いに来る程度ということだ。

よく聞いてみると、肥育は預託するとのことであったが、経営の随所に合理的な工夫が見られる。

豚舎は築三五年の昔ながらの設備だが、清掃が行き届いており、経過年数に比べて古さを感じさせない。

豚の出産時期の調整が独特で、一週当たり一〇頭出産するよう調整している。分娩舎は母豚一〇頭ずつ四セット用意し、一週間に産まれた子豚約一二〇頭を二群に分け飼育していく。全ての豚房のサイズがその群管理を行うよう設計され、流れるように豚房を埋めていく様子が印象的だ。一週当たり一〇頭の出産で、年間二〜三回転できるよう、母豚の規模と豚舎の設計がうまく調整されている。出産時期の調整や、豚の動きについての無駄の排除、清掃の重要性、いずれも参考にな



分娩舎は10頭ずつで設計されている

る。設備が古くても基本的なシステムと管理ができれば、超省力経営が可能であるという見本だ。

圧倒的な自給飼料生産の規模

次に自給飼料の生産事情を紹介したい。訪れたのは、周囲のトゥモロコシ生産者が出資して設立した、協同組合的性質を持った飼料製造・販売会社だ。トゥモロコシ生産を行うのは畑作専門農家ばかりでない。前述で取り上げたような養豚農業者のクラスでも三〇〇鈔程度の飼料畑を持つことが普通だということから、そのスケールに圧倒される。この会社では、生産者によつて収穫された飼料作物を集荷し、配合飼料を製造して各畜産農業者に出荷している。訪問した時期



飼料工場の大型サイロ

はトゥモロコシの収穫期に当たり、飼料工場には大型のトラックが列をなして、ひっきりなしに集荷と出荷の作業が行われていた。

ここでは、飼料を加工・配合する他にサイロも備え、備蓄が可能だ。飼料生産能力は年間八万二〇〇〇ト。原料を混合するほか、原料を粉碎して食下量(飼料摂取量)を上げる効果の期待できる「マッシュ」の飼料まで加工できるといふ。

広大な飼料畑から生産される原料を、自家配合に近い形で配合できることは、コスト削減への大きな強みだろう。

日本では、飼料米作付けやリキッドフィード(液体飼料・食品ロスになる栄養価の高い食品廃棄物を分解発酵させ、液状になった発酵飼料

を豚などに与えるシステム)などによる飼料費削減の取り組みが行われているが、飼料を自給化するという規模の違いを感じた。

前述の養豚農業者によると、豚一頭当たりの生産コストは約一四〇USD(約一万六〇〇〇円)で、その約七割が飼料代だといふ。

豚一頭の出荷価格はコストと同じ程度とのことであり、日本と同様、米国の養豚農業者も置かれている経営環境は楽ではなさそうだ。

米国養豚業の見据える先

農業者との面談で、「今後は購買力があり、食習慣的にも需要が見込める中国向け輸出が増えていくのではないか」「メキシコには安価な部位の肉が、日本には高価な部

位の肉が輸出される傾向にある」といった、世界を見据えた発言が出てきたことは印象的だった。

一方では、日本で現在行われている多産系の豚の導入などに関心はなく、豚そのものの生産性にかけては日本の強みと言えるかもしれない。今後、米国内のPED(豚流行性下痢)の終息やTPPの大筋合意を受けて、日本において米国産豚肉との競合が激しくなり、日本の養豚業界においても攻めの姿勢がより求められるだろう。米国では、規模と資本力の差、合理的精神を見せつけられた。

これと闘うためには、日本人の得意とする精密生産の技術を磨いていくことだ。米国での一回当たりの分娩頭数は二〜三頭だというから競えない数字ではない。

高級スーパーでは、肉の販売コーナーに、家畜が食べている飼料を透明なビンに入れて展示していた。餌の由来を示すことで安全性をアピールするということだろう。小売りの取り組みも参考にできそうだ。

世界に立ち向かうためには、相手をよく知り、迅速に対処することが肝要である。これからも海外の情報を、広く皆さまにお伝えしていきたい。



スーパーでは透明なビンに飼料を入れて展示

世界に立ち向かうためには、相手をよく知り、迅速に対処することが肝要である。これからも海外の情報を、広く皆さまにお伝えしていきたい。

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する『AFCフォーラム』『アグリ・フードサポート』のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

♥『AFCフォーラム』は愛読誌です。私は野菜料理研究者として三八年間、主に野菜を主とした食べ物で、「元気になることを提唱してきました。」

流通している野菜や種は、菓草や山菜、野草から生まれ、栽培されてきたもので、それらは本来の栄養や機能が薄れてきていると感じます。

病気は薬で治すのではなく、良い食べ物からの栄養素で体の中から元気にしなければいけません。

生産者の方にも消費者が求めている栄養素を多く含む、例えばケルタマ(体内で発生した活性酸素を除くといわれる機能性成分ケルセチンを多く含む玉ネギ)などの食材を、ぜひ栽培してブランド化

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

【郵送およびFAX先】
〒100-0004
東京都千代田区大手町一丁目九四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫
農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX 〇三三三七〇一三五〇

していただきたいと思っています。
(群馬県吾妻郡長野原町)
ひでやま みなえ
日出山 南枝

AFCフォーラム Forum

編集

大本 浩一郎 嶋貫 伸二 清村 真仁
飯田 晋平 小形 正枝 城間 綾子
林田 せりか

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <http://www.jfc.go.jp/>

印刷 凸版印刷株式会社

販売

(一財)農林統計協会
〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13
目黒・炭やビル
Tel. 03(3492)2987
Fax. 03(3492)2942
E-mail publish@aafs.or.jp
ホームページ <http://www.aafs.or.jp/>

定価 514円(税込)

- ◎ご意見、ご提案をお待ちしております。
- ◎巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

編集後記

④ 特別企画の座談会を拝聴しました。悲惨な状況の下、先駆けて立ち上がった経営者の皆さまのご発言から、自分との闘いにくじけずに前進しようとする姿勢を強く感じました。被災地では五年経っても傷が癒えていません。しかし、世界をも見据えた展開も出ています。被災地の皆さまの強い精神に背中を押される思いです。(嶋貫)

④ 「初志貫徹」とは「農と食の邂逅」の塚本さんのためにある言葉ではないのでしょうか。中学時代、アフリカの大飢饉の悲惨さに心を碎き、貢献したいと願った青年海外協力隊の一員になりました。帰国した今もタイ人の研修生へ、その想いをつないでいます。塚本さんの意志の強さに脱帽です。さて、私の初志は、ずいぶん遠くなっていました。(小形)

④ 東日本大震災から五年が経過しようとしています。今号特集は、被災地の復興についてお届けしますが、震災から五カ月後の「アグリフードEXPO」でお会いした、身近な人を亡くし、会社も被災された出展者の方が「負けません。がんばっていきます」と、ほほ笑みながらお話ししてくれたことが思い出されました。(城間)

④ 福島県の多くの農業者が徹底的に生産物を検査し、その結果を公表して、安全であることを証明しているにもかかわらず、いまだ原発事故による風評被害が根強く残っています。風評の払拭に尽力する福島県の農業者のためにも、固定化してしまった私たち消費者の意識を変えていかなければならないと感じました。(林田)

国産にこだわりの
農と食をつなぎます。

第11回 アグリフード EXPO 東京 2016
プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

8月18日^木/19日^金
10:00~17:00 10:00~16:00

主催



日本政策金融公庫

会場

東京ビッグサイト 東4ホール



3.11大震災5年後。飛躍へ



『大きくてあまいいちごになったよ』三浦 柚咲 愛知県美浜町布土保育園

■ AFCフォーラム 平成28年3月1日発行(毎月1回1日発行)第63巻12号(787号)
 ■ 発行／(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■ 販売／一般財団法人 農林統計協会 〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13 Tel.03(3492)2987 ■ 定価514円 本体価格476円

